

連載 第11回 福聚山史

篠原 重一文
及川 一晋 編

祖師堂のお祖師さま

2、感応胎藏祖師像の由来 I

お正月、新宿七福神巡りを思い立った。東西線に乗り神楽坂毘沙門天に参詣し、それより徒歩で新宿から大久保方面に戻るの経王寺大黒天であった。お寺では黄な粉餅や餡ころ餅が振る舞われ、さらに「幕末の殉教者・豊屋太兵衛の由来」なる一枚のパンフレットが手渡された。その内容は天保期（一八二九年）の初め、徳川十一代將軍家齊公の還曆を祈願する為、江戸城大奥の局達の支援・幕府の資援助・府内の日蓮宗信徒たちの熱意によって雑司ヶ谷鼠山（現在の目白駅より池袋へ向かい山手線の外側）の約二万六千坪の土地に芝増上寺・上野寛永寺に匹敵するほどの大伽藍を建て、その名を「鼠山感応寺」と名づけた。その後、わずか七年で家齊公が他界したことに

よってこの寺は幕府の命により破却の運命を辿ることになる。時代はかわり文久三（一八六三）年に至って日蓮宗の一信徒豊屋太兵衛が感応寺再建を願うも達せず、この経王寺の境内で抗議の自害を果たしたのだという。その由来がパンフレットに書いてあったのである。文中にちよつと目に

止まった箇所があった。取壊された感応寺の祖師像が「成子常円寺」に移されたことと書かれた一行である。常円寺の祖師堂に祀られている祖師像がそれなのか……？ 疑問が生じたが残念ながら不勉強な私には何も分らない。ましてや感応寺破却の件など知る由もなかった。

不思議とこのことが気掛かりになり、その後の調査にのめり込む事となる。常円寺におわす祖師像の由来、感応寺大伽藍の様子、破却の顛末。いずれにしるこの種の記録を探し出す事は至難である。手始めに各近世史にそれを求めたが、感応寺顛末に関してはごくごく少ない記述しかない。さらに当てにしていた「徳川實記」にも記録が僅かしかなかった。また江戸時代の情報誌でこの種の話題を提供しているであろうと期待した「藤岡屋日記」にさえ破却理由の一部と思われる記録が申し訳程度にあっただけで、全貌を知ることにはなかった。

六ヶ月後の七月に再び牛込経王寺へ伺い、お尋ねするも同様の結果であった。ただし、常円寺の執事上人の話によると、今から五十余年前、太平洋戦争終結直前まで祖師像はもろろん感応寺にあったといわれている。「境内分間繪図」やその他の什物類が数点存在していたが昭和二十年五月二十四日の大空襲によって本堂と共に消失したのだと

か。しかし、祖師像のみが偶然都鄙にあつて難を免れたのだというわけだ。しかし、その他由来らしき事も語り継がれておらず全くの謎となっていたのである。その後、江戸時代の研究家である三田村篤魚の著書「大名生活の内秘」、高柳金芳著「江戸城大奥の生活」、その他にも関係記述を数点見つけたが、最も重要な手掛かりとなったのは古書店で見つけた海老澤了之助著「新編若葉の梢」の巻末に付録として記載されていた文献「樞楓」（戸張苗堅）である。この書は天保期の末、江戸城の西北目白周辺の神社・仏閣二十寺を収録。内容は寺社の縁起・当時の境内の規模等が詳細に書いてあり、特に感応寺については全体の四分の一、紙数二十八枚に及び、感応寺創建、破却までの実態を知る唯一の資料であった。以上のように、感応寺の破却は大きな事件であるにもかかわらず歴史的記録や情報が少ないのは何故か？ 私は事実の究明を図り、その謎を解く事に役立てたいと決心した。

「樞楓」によると天保十二（一八四一）年十月五日、池上本門寺の日暉上人は突然、寺社奉行阿部伊勢守に召し呼ばれた。その内容は

感應寺儀先般思召を以一寺御取建被成下候共 今般思召有之に付 廢寺に被仰付る

ただその一言のみで何等の理由も無かつたという。しかし付帯条件としてまず第一に感応寺にある御紋付袷袋・戸張・水引・厨子入りの大黒天木像は寺社奉行所に持参

すること、第二に堂舎取壊しの件は幕府小普請方にて取計らうこと、そして第三に御朱印は返上すること、第四には感応寺住職については格別なお構えなく宗門の相應の寺院に移ることも勝手次第とある。そして第五に本尊その他の什物類は本門寺へ引取ることという厳しい条件が付けられていた。現在では考えられない事であるが、ここから破却の第一歩が始まるのである。なお池上本門寺は感応寺の本寺であり、本門寺の支配下にあるから日暉上人が呼ばれたのである。

本尊 宗祖日蓮大菩薩讀經座像

御丈三尺五六寸

但京都柳馬場林法橋如水一百日の間、潔斎にて作る所也 天保六末年三月廿一日於池上本門寺四十八世日萬上人開眼 御施主は當御丸大奥女中衆にして世話人は山岡氏勝井御女性也

これは「樞楓」に記載してあった感応寺ご本尊についての記録であるが、他の記録によると本尊の縁起は江戸城御本丸に仏師を召して將軍家齊公の等身に日蓮上人の座像を彫塗させ、その面影を似せて作らせた上、お像に鎧下を着せて拵え、法衣・袷袋を着せたという。その祖師像は江戸城から池上本門寺に寄附され、感応寺へ寄進されたのである。その後、ご本尊は天保六（一八三五）年三月二十一日開眼。同年七月十日に感応寺本堂の造営が始まり、翌七年七月十二日御入仏、九年七月二十日から二十七日まで本堂開堂供養と順調に推移